宗教現象に對する一考察

近藤惠聰

近世佛國に於ける社會學の創始者たるコムトが、彼の主張せる實證哲學の學說に於いて、「人智發達の三階程として形而上學時代に次ぐに積極時代を認めたる事は周知の事實である」蓋し彼の云ふ積極時代とは科學萬能の時代を指すものにして現代に於ける諸般科學の振興は、終に近代人より聖なる宗教的信念の情操を破壞したかの感がある。凡そ眞、善、美、聖等の目的價値は人格完成上常にその要請する處なり。と雖もかゝる精神的人格的要求が輕視され無視されんとするは誠に遺憾なり。彼の共產黨事件は實にその根本に於いては共產主義的經濟制度の確立の要求であり、又金融解禁外國爲替相場の變調並びに工場社會に於ける勞資對立及び協調等の問題も物質生活に關する問題であり、今や時代の一大風潮は滔々呼々として經濟的「富」の問題に趨き殆ど富と生物的生活とに終始してその底止する處を知らず。正に今日に於ける思想的二大潮流は唯物論と唯心論との絕ねざる爭鬪なりと論斷せざる可からず、此に於いてか經濟變動の恐慌(パニック)に日夜その生活を脅威されつゝある現代人にとりて最高のオアシスとは何ぞやと問へば、人必ずや其の一面に於いて私有財產制度の確立又は否定に於いて魂の

安住處を求めんとする事や又當然の理論なりとす。

斯くして諸般經濟問題の疾風的威壓は、終ひに我等が唯物論上に於ける一個の文化的要求としてマルクス、エンゲレス等の經濟組織變更の出現を望み、此に社會問題の中核をなし又人口問題並に食糧問題等、或は婦人問題中最も致命的制度と云はれる公娼制度の如き數に來れば、實に複雜極まる社會相の全面や其の解決に於いて至難なりと云はざる可からず。

之等種々錯雜紛糾せる社會現象中に於いて、特に「聖」の實現を理想とする宗教の任務が當に其の窮乏に落入り「宗教の破產」を宣告せられつゝあるは、之又留意せざる可からざる處なり、過般新聞紙の報導に依れば、米本國に於いては新教（プロテスタント）の衰亡を嘆じつゝ有るものあり、又キリストの聖地エルサレムに於ける宗教會議と云ひ、又は明治神宮外苑青年會館に於ける神、佛、基の宗教會議に於いて社會事業の新設及び世界平和の將來にその會議の陣頭を進めしも、遂に本會議未曾有の混亂に落入り龍頭蛇尾に終はりしは、人の好く知る處なり。然りと雖も日本最高新聞紙の社說に於いて「宗教は合致せざる可からざる性質のものにして之等宗教團体が其の聖なる事業の一端として社會的問題の內容に迄立入り其れを實施せんとする事は却つて其の宗教に於ける奇現象を呈するものなり」と云ふ論說を見出したるに於いては、吾人宗教家に對する一大鐵槌なりと言はずむばあらず。

此に於いてか吾人は先づ外にその全からん事よりも、內に全からん事を欲す、即ち大谷大學金子教

授の阿彌陀及淨土の觀念に就ての問題の如き、又は神の證明に於ける獨斷哲學及び夫以後の哲學的論證に於けるが如く、其の學と宗教の背反、換言せば知信分裂の問題の如き信仰の破壞之より又甚しきは有らざるの感あり、曾つて中世フランシス派の律僧ロージャベーエコン（Roger Bacan）が法皇クレメンス四世に奉りし著述の中に「諸科學の最高價値はそが神學に對する必要條件として存在す可きものだ」と曰へる法則は今日全く破壞されて、諸科學の研究的良心に於いては、寔に宗教の傳統的教學は儼然として破壞さるゝ事は勿論なりと曰はざる可からず。

然し破壞せらるゝに先立ちて新しき組織の建設が無ければならない、即ち此に宗派に於ける保守派と進取派の思想的衝突があり爭鬪が有り知信の根本的分裂が存在するのである。斯る論點に於いて吾人は先づ其の眞理探究の學徒として、外に全からん事よりも內に全からんとして傳統宗學のコペルニクス（Capernicus）的轉廻を信じ、ローランの所謂「新らしき世界」の出現を望み、感激なしには讀み得ざる不滅なる宗學の一頁が出現せん事を欣求し、以つて宗教と學との眞實なる交渉を最後に望まんと欲求する次第で有る。

— 昭和三、六、一三 —